文箱

第 107 号

〒950-2022 新潟市西区小針４丁目５番 18 号
真宗仏光寺派　瑞林寺　光輪会
電話（025）266-1846・FAX（025）266-1907
瑞林寺ホームページ http://www.zuirinji.com

九月二十三日（土）

秋彼岸法要
永代経法要
無量寿廟法要

ご案内

九月二十三日（土）お中日

十時三十分　永代経法要
　並びに　無量寿廟法要
　老院の説教
十二時　お斎（とき）
十二時四十五分　ご廟のおつとめ
十三時二十分　秋彼岸法要
　住職の説教
十五時　終了

無量寿廟におきましては七年忌を迎えられた方々に、この秋のお彼岸をもって廟内合葬させていただきたく存じます

※お彼岸当日の月参りはお休みです

瑞林寺ホームページ http://www.zuirinji.com　Google マップ　ストリートビュー境内写真UPしました。

老院の探る瑞林寺の由来と歩み ⑧

吉川町の転輪寺と瑞林寺

これまで瑞麟寺とあったり、瑞林寺と記されたり、誤解が生まれていないかと思われます。謙信の時代の公式文書には「麟」が使われ、景勝より後には「林」が用いられています。そこには特別な意味はなく、単純に難字を略して使ったと思われます。これからは瑞林寺に統一して述べたいと思います。

さて、瑞林寺のこれまでの定説は、瑞林寺はもともと現上越市の吉川町天林寺村にある転輪寺の末寺として、永正十五年（１５１８）に栃尾に建てられました。転輪寺の三世住職湖山和尚が瑞林寺の開山となってできたお寺です。それからは瑞林寺の住職には吉川町転輪寺住職が代々位につくというのが両寺の関係でした。

転輪寺住職 ⟶ 瑞林寺住職就任
三世湖山　永正十五年（１５１８）開山
四世樵岩　享禄　四年（１５３１）二世
五世千鶴　天文十七年（１５４８）三世
六世周薫　永禄　十年（１５６７）四世
七世昌派（六十九歳没）
門察　？　瑞林寺　五世

転輪寺の六世周薫に昌派と門察という二人の弟子があり、昌派は転輪寺の七世となり、門察は瑞林寺の五世につき、そのあと謙信開基の常安寺の開山に迎えられております。

石田先生の定説への疑問

ところが、今までの記録や文書をよくよく検討してみると、

① 若き謙信が栃尾にきて、修行した時に学んだ瑞林寺の和尚は、門察ではなく、二世樵岩如昂が住職の時代である。

② また門察は永禄十二年（１５６９）に亡くなった、というこれまでの伝えであるが、瑞林寺の四世住職の周薫和尚は天正十八年（１５９０）に亡くなっており、門察が瑞林寺五世を継ぐのは当然それ以降でなければならない。

今日まで世間に流布している定説に対して石田哲弥先生は、謙信・門察・瑞林寺・常安寺について、これまでの史料に初めて根本的に検討のメスを入れ、その長年の研究成果を

「上杉謙信と栃尾・瑞麟寺の歴史検証」
『頸城文化』５６号（平成２０年６月）
「栃尾における上杉謙信の事跡検証」
―上杉謙信、栃尾下向の意味と瑞麟寺之歴史―
『長岡郷土史』４６号（平成２１年５月）

の論文に発表されました。

これまでの愚生の文は、石田先生の温かいご理解のもと、そっくり頂戴して述べていることをここに改めてお断りさせていただきます。

史実に異なる門察像と瑞林寺の消長

常安寺が伝える開山門察について『門察置文』と『門察年譜』を改めて検討された石田先生は、「これまでは軍記物の相違を指摘するのみで、その本質的な探究が全くなされないまま、史実とかけはなれた歴史書や軍記本となってしまった」と述べ、新知見を出されました。

① 常安寺の建立は、門察和尚が瑞林寺の住職に就任する天正十八年（１５９０）以前でなければならない。

② これまでは、門察は瑞林寺五世常安寺開山とするが、実際は謙信が常安寺を栃尾に創設開基するにあたって常安寺の住職に就任し、その後瑞林寺の住職に就任した。

③ 門察は、謙信の諸国との重要な外交に活躍した優秀な使僧で、その功績に報いて常安寺は建立された。

と先生は考察され、その後の瑞林寺の消息について「文禄三年（１５９４）に景勝の命によりできた目録に、瑞林寺二十三石の寺領が記されていることから、少なくとも文禄三年まで栃尾に存在したことは明らかで、四年後の慶長三年（１５９８）に上杉家が会津に移転する際に、常安寺に合併する形で廃寺となったと考えるほうがむしろ自然と考えられる。」と論及されました。

淤泥華（おでいげ）

■ 今年のお盆も、東京の西徳寺様から山崎哲氏からお手伝いをお願いしました。山崎哲氏は、今年から職員の山崎明氏の弟にあたります。兄弟二人そろってのお盆参りと予定しておりました。

■ ところが、南区月潟の梵行寺様にお手伝いに来られるはずだった、やはり東京の西徳寺様の職員の一人が急な怪我でお手伝いできなくなりました。こちらは何とか手が足りるということで急遽、山崎哲氏が梵行寺様へスケットに行くことになりました。

■ とはいっても、やはりお盆のお参りはひっきりなしです。そこで院代さんのご次男が帰省中とのことでお手伝いを頼んだところ修行もかねて来て下さることになりました。

■ 院代さんのご次男、川村智明氏はまだ二十三才。大学を昨年卒業して、現在、東京の築地本願寺の学校に通ってるイケメンです。将来は院代さんのお寺である巌念寺様を継ぐ決心をされました。

■ 新人、山崎明氏と川村智明氏のお勤めに、お参りに来られた方々からたくさんの声援を頂きました。頼もしい限りです。

■ 突然のお手伝いの不在に一時はピンチになりかけましたが、それがいい具合に転じて初々しいデビューとなったことです。

■ 山崎明氏はお盆が終わってから一週間、仏光寺本山の夏安居に行ってまいりました。夏安居とは一週間本山での缶詰の修行で、お坊さんになる登竜門です。この度、お坊さんのあらゆる資格を取るための教師資格をいただいてまいりました。

■ 今年のお盆は、新人二人のデビューと活躍で、暑い夏を乗り越えられたことです。

老院の報恩記

去る七月九日、瑞林寺の十八世住職・坊守、十九世坊守の法要を瑞林寺の門徒法要としておつとめいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

引きつづき、寺族「廣澤家」としての法要を十月二日（月）につとめます。

すなわち、老院にとって両親と妻、住職にとって祖父母と母の法要を迎えます。

父住職　廣澤淳一　三十三年忌
母坊守　廣澤敏子　二十三年忌
妻坊守　廣澤美耶　二十三年忌

明年、八十歳を迎える小老においては、おつとめできる最後の報恩行と心得、御導師様、親戚寺院、御親戚に、役員の総代さんをお迎えして内輪ながら厳粛に法要をつとめさせていただきたいと思います。

瑞林寺の開基が慶長三年（１５９８）より四百三十年、代々の住職、坊守の血と涙のご苦労に支えられて、現二十世住職までお念仏のいのちを門信徒の方々と歩んで今日の瑞林寺があり、廣澤家があります。

その歴史を背負ってのご苦労の一端に、ささやかな報恩謝徳の法要のおつとめできる日を迎えること、誠にありがたくお待ち受けする小老の日暮らしです。

合掌

海に憶う

住職　廣澤　晃隆

冬の日本海の荒波は激しく厳しい。次々と大きな白波が、軍艦のように海岸線に押し寄せて、テトラポットや堤防にぶつかり、波のしぶきは高く舞上がり砕け散る。

冬の新潟の空は毎日が鉛色の曇天に覆われ、自然と気持ちも沈んでくる。子どもの頃から新潟の冬は寒くて暗く大嫌いだった。冬の海になんて来るものではないと思っていた。しかし最近、特に真冬の海岸線を走り海を見ていると、いろんなことが思い起こされる。

二十年前に亡くなった母が、亡くなる少し前に「海に連れてって」と私に頼んだ。その頃私は新潟を離れ東京のお寺にお世話になっていた。

たまたま帰省して家でゴロゴロしていた時だった。元気な時は暴れる海のようなたのもしい母であったが、病気をしてからはすっかり弱くなり、精神的にも不安定な状態だった。しかしまさか母がまもなく亡くなるとは思ってもみなかった。

夏の終わりの昼下がり、母を車に乗せて近くの海へ行った。お盆を過ぎるとクラゲが出ることもあって浜辺にはほとんど人はいない。静かな海に母はすでに水着を着て、泳ぐわけでもなくただ海につかっていた。温泉にでも入るかのように海水を体にかけたり、顔を洗ったり、口に含んだりしていた。母は太陽の日差しを浴びながら、遠くを見つめ「人はやっぱり海から生まれてきたんだね」とつぶやいた。

地球に生きる命はみんな遙か遠い昔、海から生まれてきたのだという。そしてこの命は長い長い時を超えて今に受け継がれている。

母はその大いなる海のゆりかごに包まれ、穏やかにこの大切な時間を今、生きている。その時私は、ただその母の姿を眺め、そのつぶやきを黙って聞いていた。まもなくこの世から亡くなる命とも知らず、母のいることの当たり前さになんの疑問もなく漫然と毎日を暮らしていた。

母はそれから徐々に容態が悪くなっていき、病院に入院して、もう家には帰ってくることはできなくなった。

亡くなって二十年、最近ようやくあの時母に言えなかった「ありがとう」の言葉も、苦しくても言えなかった出来事も、今は素直に告白できる。「死んでからじゃ遅いのになあ」と思いながら自然と心が笑顔になる。母の命が時を超え現在も私を支えていてくれているのだろう。

時には激しく、時には優しく私を見守ってくれた母の姿が、冬の荒々しい海と夏の穏やかな海と重なり、やさしく私を明日へと導いてくださる。

■『ひとりふたり』法蔵館　刊
平成二十八年正月号　掲載原稿

つぶやき・・・これから米の収穫がはじまります。毎日食すお米に感謝です。大雨も多かった分、ご苦労も多かったことでしょう。

永代経志納者

【平成２８年９月～２９年８月】

◇釋円静　祖妻　静枝　八十五歳
　平成二十六年五月二十五日往生
　小針　佐藤 四郎右衛門
◇芝峯院釋正教 夫 正男 八十七歳
　平成二十八年十月二十九日往生
　四ツ屋町　中由 知秋
◇釋浄観　夫　達三　八十三歳
　平成二十八年七月二十五日往生
　小針藤山　中野 恵子
◇釋光玉　母　タマ　九十六歳
　平成二十八年十一月十日往生
　幸西　大岩 明男
◇釋春海　祖　春三　八十九歳
　平成二十九年三月十七日往生
　寺尾西　渡部 晃久 渡部 和泉
◇三島家代々　祖母　カメ　六日
　父 功 八日 母 サヨ子 十九日
　平成二十九年五月五日志納
　髙橋 玲美子 山田 真美子
◇釋照榮　夫　宏榮　七十八歳
　平成二十九年二月十五日往生
　曾ノ木　須磨 ナヲ
◇先祖供養
　平成二十九年五月二十日志納
　内野　川崎 五郎
◇釋妙久　母　広川ヒサ八十八歳
　平成二十九年四月八日往生
　小針　堀川 裕子
◇浄昌院釋瑞興　祖 高市 八十八歳
　平成二十九年五月二十二日往生
　小針　前田 五助
◇釋純勝　父　興七　五月二十日
　釋貞堅　母　ケン　九月 九日
　釋和敬　兄　義和　五月 三日
　平成二十九年七月十一日志納
　福島県　渡辺 義男
◇釋榮照　夫 榮三郎 八十一歳
　平成二十八年十月一日往生
　真砂町　田中 ヨシ子
◇釋善良 姉 屋仲ヨシ 九十五歳
　平成二十五年二月十三日往生
　新津　水野 エツ

◆寄進　越山屏風
　和歌山県　渡部 健一郎

無量寿廟納骨

【平成２８年９月～２９年８月】

○釋妙幸　母 ムツ　大竹 康子
　平成二十七年九月五日往生　八十九歳
○釋浄明　長男 明　村居 照夫
　平成二十九年三月十二日往生　五十二歳
○釋榮照　夫 宏榮　須磨 ナヲ
　平成二十九年二月十五日往生　七十八歳
○仁木家先祖代々　斉藤 フジ
○芳寿慧照大姉　妻 恵美　江口 正夫
　平成二十九年三月十五日往生　八十八歳
○釋浄観　夫 達三　中野 恵子
　平成二十九年二月十五日往生　八十三歳
○釋妙信　叔母 小西シマ　梨本 正雄
　平成二十九年六月十一日往生 九十四歳
○釋妙久　母　広川ヒサ八十八歳
　平成二十九年四月八日往生
　小針　堀川 裕子
○釋浄観　夫 達三　中野 恵子
　平成二十九年二月十五日往生　八十三歳
○釋榮照　夫 宏榮　須磨 ナヲ
　平成二十九年二月十五日往生　七十八歳
○釋善良 姉 屋仲ヨシ 九十五歳
　平成二十五年二月十三日往生
　新津　水野 エツ

永代経法要 Q&A

永代経とは

永代経とは正式には「永代毎月読経」ということで、永代にわたり本堂で故人の毎月の命日には「お勤め」がつとまることです。

お浄土に生まれ、仏様に成られたご先祖さまの仏徳を讃嘆するとともに、仏様が残された子々孫々のあゆむ道を、永代にわたって光り照らしてくだされる「ともしび」のはたらきとなります。

永代経の志納金

永代にわたる、毎月のご命日の読経の懇志として一定の額を志納する、これが「永代経を上げる」門徒の作法となって伝統されてきております。

これは、子孫の方々の先祖への謝徳の念と、仏様に成られて常住されるお浄土、本堂を永代にわたってお護りする仏法護持のお志しが永代経の志納金です。

毎月読経と法要

瑞林寺では毎朝六時の「おあさし」に読経がつとまります。ご命日にはぜひ本堂へお参りください。

また、一年に一度この総法要として、「永代経法要」を秋のお彼岸におつとめいたします。このたびのご案内はこれにあたります。

このたびの永代経法要は、当山の門徒の年一度の総法要にあたります。瑞林寺に連なる門徒の方々はどなたも本堂に足を運び、お参り焼香して仏法聴聞してください。

いつ志納するのか

特別な決まりはありませんが、伝統的には四十九日の中陰法要までに志納することが一般的な作法です。

しかし、遅れて一周忌、三年忌等の法要、あるいはお仏壇、お墓の開眼のおりとか、事情により数年後の場合もあります。これはどこまでも残された子孫のお気持ちですので制限はありません。

詳しくは住職にご相談ください。

瑞林寺ホームページ http://www.zuirinji.com　Google マップ　ストリートビュー境内写真ＵＰしました